

# 「主が、あなたとわたしの間を裁きます」

副牧師：松坂 政広

＜サムエル記上 24章1節～23節 新共同訳＞

---

＜メッセージ＞

2015年の2月、わたしたちの教会は、創立20周年記念行事の一環として、聖地イスラエル旅行を計画し、実施しました。金山長老ご夫妻の祈りによって、教会の牧会者と役員が恵まれて、主と教会に仕えるようにと、ご配慮くださって実現した主からの恵みあふるる9日間でした。聖書に描かれている世界に足を踏み入れて、目にし、耳にし、肌で感じた世界は、その後今日まで（5年間）読んできた聖書が幾重にも広がりを見せてくれる、深さを味わわせてくれる実に体験でした。

朝食が7時、昼食が1時、夕食が7時という設定で、午前5時間、午後5時間たっぷり聖書の世界に触れさせていただいたのですが、3日目のプログラムを少しだけ分かち合わせていただきますと、朝一でまず、エリヤがカラスに養われたという、そこは、同時にイエスさまがサタンの試みに合われたところでもありましたが、ワジケルトというところに行き、次に今朝の聖書の舞台に行き、さらに死海を眺めるマサダというヘロデが築いた要塞にロープウェイで頂上まで行って雄大な景色を目に焼き付けて、そして昼食後、死海で泳いだ、というより浮いた状態で、現地のさっぱりわからない新聞を読むふりをしたりして写真を撮ってもらうようなことをしましたが。

午前に訪れた3つの場所の2番目が、エン・ゲディという、サウルがダビデを探したそうとしたところでした。サムエル記上後半は、終始一貫、サウルがダビデの命を狙った展開になっていますが、そのクライマックスともいえる場面が今朝開かせていただいている24章になります。

＜サウルの嫉妬＞

ご存知のように、イスラエルの歴史で、サウルが最初の王であったわけですが、それは、民衆が祭司サムエルに、自分たちには王が必要だ！と訴えて始まったものでしたね。しかも、

その訴えは、「わたしたちをさばく王を与えてください！」でした。ですから、そもそも王という存在は、裁判の責任を負うということが大きかったんですね。

サウルは千を打ち、ダビデは万を打った（18：7）。ダビデに対する民衆の人気を表わした言葉ですね。身長286センチ、50キロ以上のよろいを身に着けたペリシテの代表戦士、あのゴリヤテを小石ひとつで打ち倒したダビデに対する民衆の賛辞をサウル王はよっぽど聞き捨てならないと思ったんですね。サウル王にとってダビデは、悪霊が自身に臨む度に豎琴で癒してくれた仕え人で、婿であり、護衛の長であり、最も忠実な家来であったわけですが、そんなことは関係ありません。それほど、ねたみは恐ろしいものですね。

最近の研究によると、ねたみの感情は男性にこそ強く存在するそうですね。例えば、ねたみの強い男性は、見どころのある後輩だと思ったら、自分の下に付けて何とかコントロールしようしたり、自己評価を低める方向に心理的に操作したりして芽が出ないようにするんだそうですね。妬みの強い男性からは、知識が豊富で野心のある、いわゆる「面白い」タイプよりも、無難でおとなしく、自分が知らないことを言わない後輩の方が好かれるというんですね。面白いタイプは強意となる可能性が高いからだ。なので、こうした考え、嫉妬に支配されたが世の中では、「徹底的に踏みつぶして、這いあがってくるやつだけを使えばいい」みたいな考えが横行したりするんですね。現代のサウル王みたいな人は、いっぱいいるかもしれませんね。

#### <ダビデの忠誠>

ダビデのサウル王への忠誠は、終始一貫貫かれてきたことでした。24章のこの状況に至っても、それは、揺らぐことはありませんでした。彼は、主の導きの中で、そして彼を支える人たちの中で、その忠誠心を曲げることはありませんでした。このことは、実に味わい深い点です。

*ダビデの兵は言った。*

*「主があなたに、『わたしはあなたの敵をあなたの手へに渡す。思いどおりにするがよい』と約束されたのは、この時のことです。」*

*ダビデは立っていき、サウルの上着の端をひそかに切り取った。しかしダビデは、サウルの上着の端を切ったことを後悔し、兵に言った。*

*「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのは、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ。」 5-7節*

サウルの上着の端をひそかに切ったことをダビデは後悔した。とありますが、サウルが気づくこともなかったこのことで、ダビデは自分の心を打った、攻めたというんですね。ダビデの心には、ねたみのゆえに、自分の命を狙うサウル王に対して、悪事も反逆もいっさいないことを証してやみませんでした。

忠誠というのは、口と心を一本の線が貫いているという字と、言ったことが成るという字が組み合わさっていて、まさに、心で思っていることを口にし、口にしていることは心で思っていることで、その口にしたことが成る、ということに実に重きを置いている、と言っただけでしょうか。特に、旧約聖書は、神の預言、約束が成就するというにかかっているわけですね。

#### <主の裁き>

人はうわべを見るが、主は心を見る。とあり、わたしは人間ではないので、悔いることはないと言われた主が、「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。」と二度言われた事がありますが、主のことばを退けたサウルを主はサムエルと共に悲しまれました。

この24章は、まさに何の解き明かしも必要ないほどに、原作としても脚本としてもそのままリアルに物語が伝わってくる感じですが、あえてひとつポイントを上げるとすればですね、主が、サウル王とダビデの間を裁かれる。という点でしょうか。しかも、ダビデがそのことを2度サウル王に告げて、主がそのとおりに裁かれたことがどういうことだったかですが。

サウルとダビデの間に何があるかを明らかにする！今朝の試みは、それが、①サウルの嫉妬であり、②ダビデの忠誠であり、/嫉妬を取り除くために、ダビデの忠誠が証され、主がダビデの訴えを弁護し、ダビデが尽くした善意とサウルが囚われていた悪意が主の導きの中で和解へと導かれた。これが③主の裁きでした。

主の裁きは、サウル王とダビデを和解へと導かれました。サウル王とダビデの和解こそ、主の裁きでした。残念なことに、この後の展開をご存知の皆さまは、この直後に、サウル王が手のひらを返すことになったり、そこに自分を重ね合わせたり、人間の罪深さをいやというほど思い知らされるわけですが、このサムエル記上の24章の時点で、主がもたらされたふたりの間の和解は、主の裁きでした。

主の裁きは、人と人に向けられます。なぜなら、人と人が和解するためです。人と人が和解するために、その間にある和解を妨げるものを踏みにじることが主の裁きだからですね。

傷つけ、傷つき、罪意識の薄さと不信感に苛まれていた夫婦の間が、心が通うようになった。これが、主の裁きです。心通わせ合うものを妨げてきたものを取り除いて、夫婦が、親子が和解して、歩んでいけるように主が働かれるのです。わたしは、その醍醐味に寄り添って仕えてきました。そのために、共に主のみ前に出るとするのがわたしが担わされている働きです。

来週は、この教会の25周年の記念の礼拝です。和解がこの教会のDNAといわれる働きに残された任期の間、さらに仕えさせていただけたらと思っています。

サウルは、ただねたみのために執拗にダビデの命を狙いました。サムエル記上の後半はそれ一色ですね。けれども、主はダビデをサウルの手には渡すことはありませんでした。ですが、さすがに何度も何度も命を狙われたダビデは、そのことを恐れていました。そんなダビデをサウルの子ヨナタンは、神の御名によってカづけましたね。

「あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう  
(23:17)。」

サウル王とダビデが和解に導かれる前にです。それが、主の働きだからです。わたしたちは、嫉妬に心動かされますか？それとも、主に心動かされますか？

#### <サムエル記上 24章1節~23節 新共同訳>

##### - エン・ゲディにおけるダビデとサウル

ダビデはそこから上って行って、エン・ゲディの要害にとどまった。

ペリシテ人を追い払って帰還したサウルに、「ダビデはエン・ゲディの荒れ野にいる」と伝える者があった。

サウルはイスラエルの全軍からえりすぐった三千の兵を率い、ダビデとその兵を追って「山羊の岩」の付近に向かった。途中、羊の囲い場の辺りにさしかかると、そこに洞窟があったので、サウルは用を足すために入ったが、その奥にはダビデとその兵たちが座っていた。ダビデの兵は言った。

「主があなたに、『わたしはあなたの敵をあなたの手には渡す。思いどおりにするがよい』と約束されたのは、この時のことです。」

ダビデは立っていき、サウルの上着の端をひそかに切り取った。しかしダビデは、サウルの上着の端を切ったことを後悔し、兵に言った。

「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのは、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ。」

ダビデはこう言って兵を説得し、サウルを襲うことを許さなかった。サウルは洞窟を出て先に進んだ。ダビデも続いて洞窟をでると、サウルの背後から声をかけた。

「わが主君、王よ。」サウルが振り返ると、ダビデは顔を地に伏せ、礼をして、サウルに言った。

「ダビデがあなたに危害を加えようとしている、などといううわさになぜ耳を貸されるのですか。今日、主が洞窟であなただけをわたしの手に渡されたのを、あなた御自身の目でご覧に

なりました。そのとき、あなたを殺せという者もいましたが、あなたをかばって、『わたしの主人に手をかけることはしない。主が油を注がれた方だ』と言い聞かせました。わが父よ、よくご覧ください。あなたの上着の端がわたしの手にあります。わたしは上着の端を切り取りながらも、あなたを殺すことはしませんでした。御覧ください。わたしの手には悪事も叛逆もありません。あなたに対して罪を犯しませんでした。それにもかかわらず、あなたはわたしの命を奪おうと追い回されるのです。主があなたとわたしの間を裁き、わたしのために主があなたに報復されますように。わたしは手を下しはしません。

古いことわざに、『悪は悪人から出る』と言います。わたしは手を下しません。イスラエルの王は、誰を追って出て来られたのでしょうか。あなたは誰を追跡されるのですか。死んだ犬、一匹の蚤ではありませんか。主が裁き手となって、わたしとあなたの間を裁き、わたしの訴えを弁護し、あなたの手からわたしを救ってくださいますように。」

ダビデがサウルに対するこれらの言葉を言い終えると、サウルは言った。

「わが子ダビデよ、これはお前の声か。」

サウルは声をあげて泣き、ダビデに言った。

「お前はわたしより正しい。お前はわたしに善意をもって対し、わたしはお前に悪意をもって対した。お前はわたしに善意を尽くしていたことを今日示してくれた。主が私をお前の手に引き渡されたのに、お前はわたしを殺さなかった。自分の敵に出会い、その敵を無事に去らせるものがあるだろうか。今日のお前のふるまいに対して、主がお前に恵みを持って報いてくださるだろう。今わたしは悟った。お前は必ず王となり、イスラエル王国はお前の手によって確立される。主によってわたしに誓ってくれ。わたしの後に来るわたしの子孫を断つことなく、わたしの名を父の家から消しさることはない、と。」

ダビデはサウルに誓った。サウルは自分の館に帰っていき、ダビデとその兵は要害に上っていった。